

20140618_銀座農業政策塾／第3期第6回_議事録

「農的社会デザインとは？」

／「コミュニティ農業、農的社会に関して、実践してみたいこと、実践していること」

日時：2014年6月18日（水）19:00－21:00

場所：東京・銀座 銀座会議室

テーマ：「農的社会デザインとは？」

／「コミュニティ農業、農的社会に関して、実践してみたいこと、実践していること」

発表者：蔦谷栄一さん（農林中金総合研究所客員研究員、農的社会デザイン研究所代表、
当塾世話人）

第3期生一同（6グループ）

参加者：参加者 21人（発表者を含まない）

（会社経営、会社員、公務員、団体スタッフ、大学院生、NPO法人理事長、
行政書士、司法書士など）

第3期生からの発表「コミュニティ農業、農的社会に関して、実践してみたいこと、実践していること」:

第1班「これから農業を始める方のための情報収集・発信方法」

成田空港周辺の農地を有効活用し、新規就農者の研修施設である「有限会社グリーンポート・アグリ」の見学報告を行いました。実際に行ってみることが大切というコメントをいただきました。農業は技術だけではなく、なによりも人間力が問われる世界だと感じましたとのことでした。

第2班「都市農地の活用／市民農園・体験農園の立ち上げ方」

世田谷区の川原農園（桜丘）の見学報告を行いました。体験農園は農家にもメリットがあると思います。都市部におけるコミュニティ農業につながるのではないかと提起しました。

第3班「市民農園・体験農園の運営とコミュニティのつくり方」

千葉市の「萩台市民農園」、君津市の「カズサ愛菜ガーデンファーム」の見学報告を行いました。こちらでは市民自治により運営されています。ミーハー×マニア＝コミュニティ型シェア農園へつながるとまとめました。

第4班「都市農村交流の発展としての「CSA」

我孫子市にてCSAの実践をされている農家「わが家のやおやさん 風の色」の見学報告を行いました。CSAの特徴とされる、①代金前払い制度、②地域内流通、③農産物の引渡し方法のメリット・デメリットについて実地で検証を行いました。楽しくやっていることがCSAの成功につながるとしました。

第5班「野菜の調理法など「食」を通したコミュニティ農業、農的社会」

今治市の「学校給食」、三重県多気町「高校生レストラン・まごの店」、兵庫県「はたんぼキッチン」などの見学報告を行いました。生産者と消費者のつながりが大切であり、食材のうま味を生産者と消費者で意識することです。これがコミュニティ農業へつながりますとしました。

第6班「コミュニティ農業、農的社会と「農政」

都市に農地を増やした事例について見学報告を行いました。世田谷区ではアパート敷地を農地に戻しました。渋谷区では区有地（清掃工場跡、小学校内など）を農地に戻しました。背景には都市の緑化政策がありました。ニューヨークのコミュニティ・ガーデンは市民主体で行われており、また、ウィーンのグリーンベルトは100年前の都市計画が生きるとします。都市農地は農業問題だけでなく都市問題でもあると提起しました。

薦谷さんからの講評

各班からの熱意あふれる発表をいただきました。現地への取材により、仮説の確認をすることによって、頭で考えているだけではわからない実情を理解するとともに、これへの対処策を考えていくことを体験されてきました。

発表をつうじて、農業にはコミュニティを回復させていく可能性を秘めていることがよくみえてきたように思います。市民農園・体験農園の先にあるものとして、コミュニティがあり、そして、自治（自分たちでルールを作る）がある。これは、自らの暮らしは自ら守っていくことでもあります。また、CSRは農家とのコミュニケーションによりリスクを分散することでもあります。これらについて一般市民の共感をいかに得るかという課題も見えてきました。

あわせて都市農業についての注目が、コミュニティの視点、あるいは制度・税制の視点から集まっていることがわかりました。

薦谷さん発表「農的社会デザイン概論」:

農業についてはもっぱら「産業としての農業」としてしか語られてきませんでした。そうではなく、農業にはコミュニティや土地・自然・環境も含まれます。産業としての部分と社会的共通資本としての部分の両者があること、この両者のバランスをもってみていくことが大切です。

また、農業は多面的機能を持っていますが、「多面的機能」という言葉だけではすくいきれないものがあります。多面的機能という言葉は受動的であるかもしれません。そこで、農の持つ社会デザイン(変革)能力というものを考えてみました。多面的機能は現在あるものを評価し、社会デザイン能力によって積極的に創造していく、次の社会を作っていくということです。

なぜ、農にひかれるのでしょうか？農の持つ社会デザイン能力に対する潜在的なあこがれのようなものを多くの人を感じ始めているからであるように思います。

現代はコミュニティを喪失し、貨幣中心の社会になり過ぎています。生産者と消費者は貨幣を媒介とすることによってつながっています。これが本来の「つながり」を喪失させてしまいました。農は生産者と消費者とのつながりを取り戻す力があります。

知性の偏重や、身体性・霊性の欠如により、村上和雄氏がいう「サムシング・グレート」、すなわち世の中には理屈では説明できない大事な本質的なものがあるはずですが、これを感じ取れなくなってしまいました。農は生命力や不思議を感じさせてくれ、人間に本来の感性を養ってくれます。

生産手段と労働力も分離してしまっています。これをくっつけたいという思いが潜在的にあ

るのではないのでしょうか？ 市民農園や体験農園等によって分離してしまった生産手段と労働力、都市と農村を接近させていくこともできる。そしてこれはコミュニティを回復させていくということにもつながります。

また生産した農作物をおすそ分けすることもできます。貨幣経済ではサポートできない部分を補うこととなります。贈与の精神と言い換えることができます。

これらの力が、農の持つ社会デザイン能力の中身となります。これは食の持つ社会デザイン能力にもつながってきます。

日常性（ケ）を大事にしつつ、思ったら農の持つ社会デザイン能力を発揮していく。楽しくチャレンジしてみる。これによってなるべくお金を使わない世界を作っていけないかと考えています。お金では買えないもの、お金には換算できないものを交換していく世界です。人とのつながりに豊さを感じる世界です。日本は成長社会から成熟社会へと転換していくべき段階に来ており、農的社會を創り上げていくことが求められています。

農村地域における人材確保が大切になっています。ヨソモノ、ワカモノ、バカモノを活かしていくことです。そのための第三者的で客観性のある仲介役が必要です。

ぜひ、第三期生には本日の発表を踏まえて実践していただきたいと思います。そして仲介役としての役割をも果たしていただくことを期待します。

以上